

【9】 「板東俘虜收容所」で結ばれた、日本とドイツとの交流

1 生徒用資料解説

「板東俘虜收容所 要図」(「ドイツ日本研究所」所蔵)

この図は 1919 (大正 8) 年当時の板東俘虜收容所の地図である。この図からは、「将校棟、病院、図書館、印刷所、炊事場、製パン所、酒保、兵舎、タバトー、製菓所、営倉、管理棟、倉庫、洗面所、便所」があったことがわかる。酒保 (しゅほ) は、軍事施設内に設けられた売店に類するもの。「タバトー」とは、「およそ 40 軒の小屋からなる営業区域のことで、青島 (チンタオ・中国) の商店街、大鮑島 (タバトー) にちなんだもの」である。

《引用・参考文献等：③》

「板東俘虜收容所 全景」(鳴門市ドイツ館所蔵)

「板東」は、收容所開設当時の板野郡板東町、現在の鳴門市大麻町板東のこと。

「俘虜」とは、「戦争で敵軍にいけどりにされた者」をさし、捕虜と同義語。第二次世界大戦以前の 1899 年に制定された「ハーグ陸戦条約」では、「俘虜」と記されている。

「板東俘虜收容所」は、第一次世界大戦下、中国山東半島におけるドイツの租借地をめぐる戦闘で、敗れて俘虜となったドイツ兵を收容するために設けられた施設である。中国から移送されてきた 4,700 名の俘虜は、当初、全国 12 カ所に設けられた仮設の施設に收容された。その後、收容環境の改善を図るため、大規模な兵舎 (バラック) 式の收容所が、「板東」を含めた全国に 6 カ所 (久留米 [福岡県]、名古屋 [愛知県]、習志野 [千葉県]、青野ヶ原 [兵庫県]、似島 [広島県]) に建設された。板東俘虜收容所には、四国の徳島、松山、丸亀の各收容所から約 1,000 名が移送された。

《参考文献等：①》

「^{まつえとよひさ}松江豊寿所長」(鳴門市ドイツ館所蔵)

松江 豊寿 (1872 ~ 1956) は元会津藩 (現在の福島県) 出身の軍人。1914 (大正 3) 年、徳島俘虜收容所長に就任。その後、各地の收容所の統合に伴い、1917 (大正 6) 年、板東俘虜收容所の所長となった。同年、陸軍大佐となる。その後、1922 (大正 11) 年、福島県会津若松市長となる。映画「バルトの楽園」の主人公のモデルとなった人物。

《参考文献等：②》

板東俘虜收容所新聞「デイ・バラック」第一巻の表紙 (「鳴門市ドイツ館」所蔵)

板東俘虜收容所新聞「デイ・バラック」最終版表紙 (「鳴門市ドイツ館」所蔵)

「デイ・バラック」は、戦争の状況や收容所内の生活に関わることを記事にした收容所内で発行された新聞である。編集や印刷は俘虜によって行われた。「毎週日曜に発行され、月五十銭の購読料で予約」を取り、「どの号も二四ページ前後」あった。1919 (大正 8) 年 1 月から「ドイツ人俘虜の送還の現実化」によって、「刊行が停止」された 9 月の間は、「新聞は週刊から月刊」に変更された。

《引用・参考文献等：②》

「バラック内部の様子」（「鳴門市ドイツ館」所蔵）

板東俘虜収容所のバラックは東西に4棟ずつ並んで建てられた。建設当時の1棟の規模は全長72.90m、幅7.50mであった。写真は西側の最も北側に位置した第4棟の内部を写したもので、内部の様子に加えて、バラック独特の梁組みが良く分かる貴重な写真である。

「鳴門市ドイツ館全景」

ドイツ館は、板東俘虜収容所のドイツ兵俘虜と地域の人々との交流を記念し、1972（昭和47）年に建設された。開館当初は、「元俘虜たちから寄贈された資料を中心に」展示されていた。開館20年後の1993（平成5）年には、「施設の老朽化や収集資料の増加により手狭になって」きたことから、現在の地に移転、新築された。ドイツ館には、「ドイツ兵俘虜達が作成した図書や写真、日用品等を初めとした当時の貴重な資料が数多く保存・展示」されている。鳴門市大麻町桧にある。

《参考文献等：⑤》

2 参考文献等

《主なもの》

- ①：「第九」と日本出会いの歴史（ニコレ・ケンプケン著 2011年 彩流社）
- ②：「第九」の里 ドイツ村（林 啓介著 1993年 井上書房）
- ③：板東ドイツ人俘虜物語（林 啓介他著 1982年 海鳴社）
- ④：NPO法人鳴門「第九」を歌う会HP（<http://www.naruto-9.com/>）
- ⑤：鳴門市ドイツ館HP
（<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/index.html>）

《その他》

- ：鉄条網の中の四年半—板東俘虜収容所詩集—（ヴィリームツテルゼー 1979年 井上書房）
- ：鳴門市史 中巻（鳴門市編 1982年）
- ：板東俘虜収容所物語（棟田 博 2006年 光人社）
- ：徳島の文化財（徳島県教育委員会/徳島新聞社 2008年 徳島新聞社）
- ：板東俘虜収容所の全貌—所長松江豊寿のめざしたもの—（田村一郎 2010年 朔北社）
- ：板東俘虜収容所跡調査報告書—鳴門市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—
（鳴門市教育委員会 2012年）
- ：鳴門市公式サイト 「第九のふるさと」
（<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/index.html>）

3 ねらい

現在の鳴門市大麻町板東にドイツ兵俘虜を収容した「板東俘虜収容所」が設置された歴史的背景を知るとともに、その収容所での俘虜の生活の様子を通して、この収容所が、なぜ、後に日本とドイツとの友好的な交流の架け橋となったのかについて考えさせる。

4 教材選定の理由

鳴門市大麻町板東にある「鳴門市ドイツ館」は、鳴門市とドイツとの交流の象徴といえる施設である。このドイツ館が板東の地に建設された理由は、第一次世界大戦時に中国山東半島におけるドイツ租借地（青島）を守備したドイツ兵を収容した「板東俘虜収容所」が当地に設けられたことと深く関わる。

板東俘虜収容所が設置されていた期間は1917(大正6)年から1920(同9)年までの約3年間。この間、約1,000人のドイツ兵が収容所で過ごした。第一次世界大戦下の俘虜収容所という厳しい制限が課せられるべき場所ではあったが、板東俘虜収容所の松江豊寿所長は人道的で寛容な収容所の運営を行い、俘虜たちの自主的な活動を認めた。

また、俘虜の帰国後、草に埋もれた状態で忘れられようとしていたドイツ兵の慰霊碑を地域の人たちが清掃活動が続けていたことがドイツに伝えられたことがきっかけとなって、昭和40年代に日本とドイツとの交流が次第に活発となった。そして、鳴門市は元俘虜から寄贈された多くの資料を展示するとともに、ドイツ兵俘虜と地域の人々との交流を顕彰するために、昭和47年にドイツ館を建設した。

この教材は、こうした板東俘虜収容所の歴史的経緯や収容所内の俘虜たちの生活に焦点を当てたものであり、この教材をとおして、当時のドイツ兵俘虜の人たちと、地域の人々との交流が現在のドイツと日本との友好的な交流に繋がっていることに気づかせたい。そして、こうした学習活動によって、郷土の歴史への理解やふるさと徳島に対する誇りと愛着を深めることに資すると考え、本教材を選定した。

5 学習の流れ（例）

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 鳴門とドイツとの交流について、知っていることを発表する。	○「ドイツ館」・「第九」などの発言を引き出すことにより、「板東俘虜収容所」についての学習意欲を喚起する。
展開	2 本文の「板東俘虜収容所とは」を読み、「板東俘虜収容所」が設置された時代背景を理解する。	○第一次世界大戦と日本との関わりについて学び、ドイツ兵の俘虜が日本に送られた経緯を理解させる。 ○収容所全景写真などに見える「バラック」の一部が現存し、「道の駅」などで身近に見学できることなども説明する。
	3 「板東俘虜収容所」の松江所長の人道的な運営方針の下で、俘虜たちが所内で自主的な生活を送っただけでなく、地元の人たちとも活発な交流を行ったことに気付く。	○所内での自主的な活動、特に文化・スポーツ面の活動を図版資料等を用いて詳しく理解させる。
	4 当時の地元の人々と俘虜との交流に加えて、その後の長年のドイツ兵慰霊碑の清掃活動が日独交流のきっかけとなったことを理解する。	○日独交流がどのようにして始まり、現在のように活発になったかについて正しく理解させる。
結論	5 本時のまとめをする。	○ワークシートを活用し、自己評価を行わせるとともに、授業後の感想を発表させる。